

フレンチネイルにおける多者目線からの印象評価

青島 さやか 宮下 芳明

明治大学 大学院 理工学研究科 新領域創造専攻 デジタルコンテンツ系

An Evaluation Experiment of French Nail from Diversified Viewpoints

Sayaka Aoshima Homei Miyashita

Program in Digital Contents Studies, Program in Frontier Science and Innovation,

Graduate School of Science and Technology, Meiji University.

アブストラクト

近年、ファッションを情報科学技術によって支援する研究が行われはじめてきているが、おしゃれには自分を楽しめるという目的と、他者を楽しませるという目的がある。本研究では、性別によって受け入れられ方が異なるファッションとしてネイルを対象とし、自分も他者も気に入るようなネイルデザイン、あるいは同性や異性にも好まれるネイルデザインを見いだすシステムの開発を目指し、印象評価実験を行った。その結果ネイルデザインにおける色彩や配色には、男女で好みが異なる場合があること、そして男女で好みが共有できる範囲が存在することがうかがえた。

1. はじめに

近年、ファッションを情報科学技術によって支援する研究が行われはじめてきた。佐藤らのシステムsuGATALOG[1]は、ユーザの姿を撮影し、コーディネーションをシミュレートすることで毎日の服装選びを支援する。岩渕らの電腦化粧鏡[2]は、女性の毎朝のメイクアップ作業に対する不満に焦点をあて、様々な照明や状況に応じたメイクアップを行うことができるシステムである。杉田らは、洋服の撮影とタグ付けを行いアーカイブ化できるタグタス[3]を構築した。

おしゃれには、自分を楽しませ自己を前向きにすることによって樂しませるという目的がある。そして後者の場合は特に、異性に対して意識されることが多い。いわばファッションとは、自分と他人のダブルユーザ、もしくは自分と同性、異性のトリプルユーザによる目線から行われていると考えることができる。これらのどの目線からも好まれるファッションデザインを行うことは難しい。自分では気に入っているデザインが他者にも受け入れられるとは限らないし、一方で同性のみに評価されるデザインも存在する。

本研究では、性別によって受け入れられ方が異なるファッションとして、ネイルを対象として取り上げる。約8割の男性がネイルについて無関心であり、ネイルに対する支持率も降下しているという調査がある[4]。このため、女性側からすれば、自分が納得でき、かつ同性からも支持され、さらに異性からも好まれるようなデザイン

を行うことは非常に困難であるといえる。

本研究では、自分も他者も気に入るような、あるいは同性や異性にも好まれるネイルデザインを見いだすシステムの開発を目指し、印象評価実験を行った。

2. 実験

本実験では、爪に2色の配色のネイルデザイン（フレンチネイル）を施したカードを用いた。配色に用いた色彩は、ネイルデザインによく見られる色彩の中から、ピンク、赤、黄、緑、青、紫、茶、白、黒の9色を選択し、合計72通りの配色を作成した（図1）。



図1 実験に用いたカード

実験ではこれらの画像を被験者に好みの順番に並び替えた。最上位には72点、2位には71点…最下位には1点と点数をつけて集計する。また、好みの順に並べ替えたカードのうち、どこからが自分の好む範囲かを示す境界線を引いてもらった。このようにして得られた

「好みの範囲」を分析し、それらのデザインや男女差について考察する。被験者は20代の男女25名で実施した。

3. 結果と考察

図2は各ベース色の得点を男女ごとに平均したグラフである。緑・青・紫をベース色とした配色は、女性が感じている以上に男性に評価されている。また逆に、黒をベースとした配色については、女性が感じている以上に男性の評価が低いことが見て取れる。

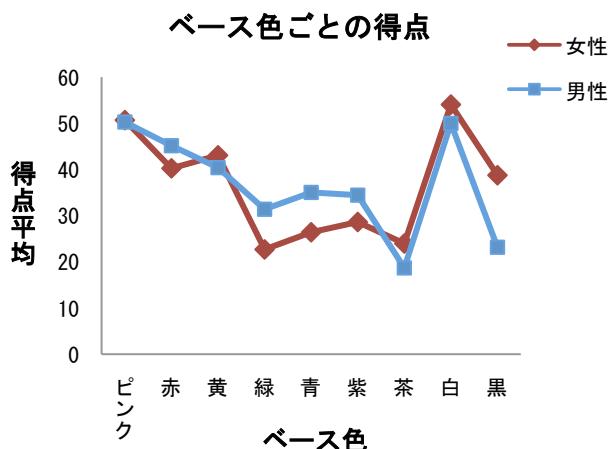


図2 ベース色ごとの得点

被験者が評価したデータをもとに、合計得点が高い順に並び替え、上位10配色と下位10配色に着目して男女比較を行った。上位10配色については男女共に同系色での配色が好まれている。中でもピンクや赤といった暖色よりの色彩によるデザインが人気であり、特にピンクが広く使用されているデザインは、ネイルを施していない爪の色に近いナチュラルな配色であるためと考えられる。女性の上位7位であるピンク地に黒の配色を施したデザインは、男性には27位とやや中間に位置づけられており、女性には好まれる配色が同等に男性に好まれない場合があることがわかる。またピンクがベース色であっても、普段見慣れていないような色彩との配色デザインは男性には受け入れられない傾向が見てとれた。

下位10配色については、男女共に茶を用いた配色が好まれないことがわかった。男性においては茶だけでなく、黒を使用した配色も好まれない傾向にあり、女性においては青や紫、緑といった寒色よりの色彩による配色は好まれない傾向にあった。男性の下位6位にある黒地に黄の配色を施したデザインは女性では35位であり、女性にとってはそれほど嫌悪される配色ではないようである。上位の例と同様に、男性には好まれない色彩であっても、女性にとってはそうでもないことを示している。

好まれる範囲となったデザインは、女性の半分以上が好むと評価したデザインは70種類、そのうち全員が好むと評価したものが39種類と、好まれるデザインが多

かった。一方、男性におけるデザインの評価は、半分以上が好むと評価したデザインが65種類と女性同様に広範囲で好まれていることがわかったが、そのうち全員が好むと評価したものは8種類と女性に比べて極端に少なかった。多くの男性から好まれないと評価されたデザインを図3に示す。



図3 男性の多くが好まれないと評価したデザイン

ここから見てもわかるように、男性に好まれないと評価されるデザインは茶と黒が地の色として使われているものであった。男性からも比較的好印象であったピンクや黄色を使用したものであっても、男性からは好まれないデザインという評価を受けている。デザインの中に自分の好まない色彩が含まれている場合、色の組み合わせに関係なく好まないと感じる男性が多いようである。

以上から、ネイルデザインにおける色彩や配色には、男女で好みが異なる場合があることと、男女で好みが共有できる範囲が存在することがうかがえた。この範囲を有効に使用することで、性別を問わず好まれやすいネイルデザインの検討が可能であると筆者らは考えている。

参考文献

- [1]佐藤 彩夏, 渡邊恵太, 安村通晃 : suGATALOG : ユーザの姿を利用したコーディネート発見支援システム. インタラクション 2009 予稿集, March 2009.
- [2]岩渕 絵里子, 椎尾 一郎 : 電脳化粧鏡 : メイクアップを支援する電子鏡台, 第 16 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (wiss2008), 日本ソフトウェア科学会研究会資料シリーズ, ISSN 1341-870X, No. 58, pp. 45-50, 2008.11.26-28.
- [3]杉田 奈緒子, 塚田 浩二, 杉野 碧, 椎尾 一郎 : タグタンス : 服データベース作成を支援する家具, インタラクション 2008 論文集, 情報処理学会シンポジウムシリーズ, ISSN 1344-0640, Vol. 2008, No. 4, (ポスター発表, 付録 DVD-ROM), 2008.3.3-4.
- [4]インターワイヤード株式会社 : ネットリサーチ, ディムスドライブ
<http://www.dims.ne.jp/timelyresearch/2009/090820/>